仙台大学紀要
2008, Vol. 40, No.1, pp.47-59

昭和初期の桐生高等工業学校の学校文化に関する一考察

― 同窓会機関紙上の語学教育論争分析の試み ―

坂　根　治　美

School culture of Kiryu Koto Kogyo Gakko in the early Showa era
— An attempt to analyze a dispute on the organ of alumni association —
SAKANE Osami

The aim of this paper is to examine the characteristics of school culture and graduates of Kiryu Koto Kogyo Gakko by analyzing a dispute on language education which was developed on the organ of alumni association from Showa 4 through into 5.

The opinions of two graduates of this school were opposed to those of two teachers of the school who were both graduates of Koto Gakko.

In those days, the differences between the characteristics of the school culture of Kiryu Koto Kogyo Gakko and Kyoyoshugi culture of Koto Gakko were increasing.

It is conceivable that the distinction strategy of the graduates of Kiryu Koto Kogyo Gakko toward the graduates of Koto Gakko emphasized the practicality of language education under these circumstances.

Key words: school culture, distinction strategy, Kiryu Koto Kogyo Gakko

1．はじめに ― 課題の設定 ―

大正15年１月17日、修養主義運動の代表的団体である修養団の支部を設置して、「自己の修養につとめ、人格の向上をはか」る等の目的を持つ修養団[1]の活動を本格的に開始した官立実業専門学校の桐生高等工業学校（以下「桐生高工」と略記）は、その直後に始まる大正15年度から体育の振興に積極的に乗り出すことになり、翌昭和２年度以降さらにその動きを強めていくことになる。同校では修養主義教育の本格化と体育振興が同時に行なわれた訳である[2]が、同校ではまた昭和２年度から従来以上に外国語教育に力を入れていくことにもなる。そうした状況が進行していくなかで、昭和３年度末から昭和５年度にかけて、同校の同窓会機関紙である『桐生高工時報』（以下、本文では『時報』と略記）紙上で語学教育論争が展開されることになるのである。本論文はその論争を素材として、当時の桐生高工の学校文化ならびに同校卒業生の特質を検討することを課題としている[3]。

2．桐生高工卒業生と外国語

昭和２年４月11日の新学期始業式訓辞の冒頭で桐生高工の西田博太郎校長は、「最近科學の進歩に伴ひ語學には更に力を注ぐべき時代となりしかば英語、獨語に一層重きを置く事にしま

した」[4]（圏点は原文のまま。以下同じ）と語っているが、同年７月発行の『時報』には、西田校長自身が卒業生や生徒を対象とする英書翻訳の講習会を行なうことが報じられている[5]。また、同年11月の『時報』には、同校紡織科で英仏独和対訳機織術語集の編纂がされ、同窓会員にも実費で頒布する旨の記事が掲載されている[6]。

以上のような動きが報じられた昭和２年度であったが、昭和３年１月には専門学校令が改正されることになる。昭和２年３月の時点で西田博太郎校長は、「今日の如く奉仕の精神を要し、國家本位に働く人物を必要とし、怠業氣分雷同性、依頼心を排斥すべき大切なる時期に、眞に骨あり身ある人物を活社會に送らんには、或は法令なり根本規定の旗幟を人格中心に思切つてぬり換へる事も急務ではないかとも思はれる」[7]と語っていたのであるが、実際に専門学校令第一条に「人格ノ陶冶及ビ国体観念ノ養成ニ留意スヘキモノトス」という字句が追加されることになったのである[8]。西田は、昭和３年の新年始業式において次のように語っている。

> 從來の專門學校令には單に高等の學術技藝を修得せしむる事を主眼としたれど先頃樞密院の院議に於て之を改正し人格の陶冶と國家觀念の濃厚なる體得を第一主眼とする事になつたのでありまして如何に先輩が皇國の前途を憂ひ青年に期待する處大なるかを知る事が出來ます[9]

こうして改正された専門学校令のもとでの教育が始まった昭和３年度の桐生高工であったが、昭和３年度の『時報』上には、卒業生達の外国語に関連するコメントをいくつか見ることができる。

まず、外国の雑誌に掲載された新情報の紹介を『時報』に対して要望する声である。大正14年応用化学科卒業で日本電池(株)研究課において鉛蓄電池研究に従事している堀越友造が、「時報上に内外雑誌に出て來る最近の目新しい工業上の研究などを紹介する欄がほしい」[10]と要望しているし、大正９年紡織科卒業で和歌山紡績(株)勤務の岩本義延は、「外國雑誌に目新しいことがありましたら御掲載を願ひます」[11]という希望を述べている。こうした要望をうけた『時報』編集部は、堀越友造には「内外雑誌のアブストラクトは早速試みたい希望です」[12]と回答し、岩本義延に対しては「外國雑誌よりの譯出掲載は只今計劃中です。ポツポツやつて見ませう」[13]と回答している。昭和初期の当時、実業界で働く同校卒業生が海外からの新情報を求めていたことを示すやりとりである。

そうした状況下で、外国雑誌から直接情報を得ていると報告する卒業生を見ることもできる。昭和３年応用化学科卒業で陸軍被服廠試験部に勤務する瀬下精一は、「只今皮革に關する外國雑誌の飜譯などやり、自分の勉強と同じで愉快です」[14]と述べているし、大正13年応用化学科卒業で製油業に従事する小池清澄は、趣味の一つとして「油に關する米國の雑誌」[15]と答えている。いずれも同校卒業生にとっての実用的な語学の重要性を端的に語る私信であるといってよいだろう。

昭和３年度の『時報』には以上のような記事を見ることができるのであるが、この年の年度末の『時報』昭和４年２月号に卒業生益田苦良（くろう）の論説「語學教育を改革せよ」が掲載されたことをきっかけとして、『時報』上では以後昭和５年９月までいわば語学教育論争が展開されることになるのである。

３．昭和４年掲載の論説の概要

論争のきっかけを作った益田苦良は大正14年の応用化学科卒業生で、東北帝国大学で化学を学んでいる学生である[16]。「語學教育を改革せよ」[17]は彼が昭和３年12月27日に執筆したものであるが、そこでの彼の主張の骨子は次のようなものである。

自身の桐生高工時代の語学教育を振り返り、それは「中學校同様に小説の短篇を集めた讀本か或は一册にまとまつた小説の譯讀」であった

が、そうした教育によって「専門の學術に全く關係のない澤山の單語を無理矢理につめ込んで、それが専門雑誌の素讀に何程の利益をもたらさう」と益田は述べる。つまり彼の期待する語学教育は、「専門原書或は雑誌を讀んで専門學に關する自己の知識」を得るためのものであるべきだとして、「母校（桐生高工：引用者註）ならば讀本は二種類必要である。第一種は應用化學科及び色染科生徒用、第二種は紡織科及び機械科生徒用[18]である。讀本は専門原書及び雑誌より材料を集め、之を適當に編成すればよ」く、「出來るだけ多量の文書を出來るだけ短時間に讀んで内容を掴む事が出來る様に教育して貰ひたい」（下線は引用者。以下同じ）と主張しているのである。実業専門学校生徒にとっての実用性を強調した語学教育論であるといってよいだろう。

益田の論説が掲載されてから２か月後の『時報』昭和４年４月号には、大正８年に桐生高工の前身の桐生高等染織学校（以下「桐生高染」と略記）紡織科を卒業（第一期生）し、紡績会社勤務ののち桐生高工助教授となってイギリス留学中の堀越勇次郎から送られた「語學教育改革論を讀みて」[19]が掲載されている。

「益田氏の「語學教育を改革せよ」を讀んだ僕は遙か一萬數千哩の歐州の彼方から双手を擧げて賛意を表したい」と書き出した堀越は、「専門學校の語學教育の目的が實用的即ち専門原書の研究に資する爲めにあるとせば議論はわかりきつてゐる筈である」として、在籍するノッティンガム大学の実例を紹介し、「結局益田君の意見に全く一致してゐませんでしやふか、母校でも成るべく早く適當の本を編纂されて御使ひになる様に祈ります」とまとめている。益田、堀越の２人はいずれも実用重視の語学教育観を示したといってよい。

以上のような２人の卒業生達からの語学教育改革論をうけて、同校の英語担当の教授である大沢治作がやはり留学中のイギリスで昭和４年５月８日に執筆した「語學教授法に就いて」が『時報』の昭和４年６月号と７月号に分載されている[20]。約17,000字におよぶ長文のこの論説において、大沢は「英語は日本人の生命に觸れない日本人の生活々動と沒交渉であり、日本學生の命と結び付かない、それ故に出來ないのが當然なのだ」という論旨で持論を詳細に展開する。具体例として彼は「旅は道連れ」という言葉をとりあげながら、「英語の本や雑誌が讀めないのは單語が六ツ敷いからでは無くて、取るに足らぬやうなやさしい字の命に觸れる事が出來ないからなのだ」、「専門關係の本や雑誌が讀めないのは専門語の爲めでは無いのです、實に日常ありふれたintoだとかofだとかallowだとか云つたやうな字が、飛んでも無い所に微妙な關係を作つて居つて、其れが解らない爲めなのです」という説明をしている。

そして「學校で英語の實力を付ける方法は無いかと云へば、其の方が無いではない、其れは少くとも中等程度以上の學校では凡ての學科を英語で授け、學校に於ては英語をシヤベらせ、試驗には凡て英語で答案をかかせ英語で無ければ卒業が出來ぬ、英語でなければ出世が出來ぬと云ふやうにする事だ、斯うすれば多くの論者が期待して居る位な速度で英語の實力が付くであらう」と述べながらも、「現在の印度人が右に述べたやうな境遇に有るのであるが（中略）彼等の生活は實に悲慘なものです（中略）日本人には印度人の眞似は出來ぬ」という考え方を示しているのである。

以上のようなかたちで「中學校で五年も骨折つて英語の出來ぬは何故か」とか「其の上專門學校であれ丈け英語をやつて、尚ほろくろく本も讀めぬは教授法の爲めだ」というような「英語を極めて容易なもののやうに考へて居る論者」への反論を示した上で、大沢は論説の末尾の部分において益田、堀越両者の意見に即したかたちで４点にわたって意見をまとめているが、その概要は次のようになる。（１）学校が単に功利実用のみを目的とせず、円満な人物の修養という理想をもつとすれば、幾分なりとも文学的方面を加味することが必要ではないか。（２）専門の本や雑誌が読めないのは専門語のた

めではなく、「てにをは」などの変通自在なつかまえどころのない語のためである。(3)エネルギーの浪費は極力避けるべきであることに異論はないが、あまりに功利的に走ることには注意しなければならない。(4)専門の教科書を作るのは結構なことだと思う。各科で適当な原書や雑誌等から材料を集めて各科の教員が教授したら有益であろうが、それで専門の雑誌等が卒業の頃は大分楽に読めると思うのは間違いだと思う。

大沢は以上のような主張をしているのであるが、彼は先の益田、堀越の考え方を功利実用のみを重視するものとして否定しているととらえてよいだろう。

ここまで紹介した益田、堀越、大沢の論説をうけて、昭和4年11月号の『時報』には匿名(筆名は「烏羽玉生」)による論説「一般にそんなに英語は必要か」[21]が掲載されている。

タイトルに示される様に、この論説の筆者は「むづかしい英語が其んなに我々一般に必要なものかどうか」を論じているが、その概要はこうである。「既に我ヶ國の學術は世界的水平線に漕ぎつけた。最早此からは、獨創的に進路を開拓するばかりの時代となつてゐる」ので「學術修得の準備としての外國語教育は全然不必要である」。また、「漢學を修むる事に依つて文字の智識以外に人格的教養を受ける様に此に依つて情想教育を行ふを得るものだと云ふ人がある。途方もない贅澤極はまる話しだ」。よって、語学は随意科目とし、「一つでも専門學科か基礎學科を餘分に教へ込みたい。その方がどれ程一般技術者の專門的内容を深くし得るか知れない」。

つまり、益田、堀越が貴重な時間の有効活用のために語学教授法を改めようと主張するのに対し、この筆者は「專門學生にして見れば、必要な科目はフンダンにある」から「役に立たぬ語學」は必修からはずしてしまうことを主張し、大沢のいう「圓滿なる人物の修養」のための語学教育を強く批判しているのである[22]。

この匿名論説に対する直接的な反論として翌月の『時報』に掲載されたのが大正12年紡織科卒業生で、その後弘前高等学校を卒業して医学部進学を志望している高橋栄穂[23]の論説「外國語を學ぶ者としての僕」[24]である。その論点の中心は、「世界の文明に一歩おくれてかけ足で追付きつゝある日本が、其の言語の中に之等外國語を其のまゝ取入れられねばならぬことは、むしろ當然なりと云はざるを得まい。現在の世界を靜觀すれば英語は世界語たるの觀を呈し、(中略)日本がこゝに著目して英語を第二語學として來るべき時代の中堅たるべき學生に課したることは、大いに意味あることと思はねばならぬ。いわんや英語の心得あるものが、他の外國語を學ぶに際し短日月にしてなし得るを思へば、むしろ此の手段の卓見たるを感ずるであらう。其の効果の僅少なるが故に之れを全廢せよと云ふが如きは暴言も甚しきものと言はざるを得ぬ」ということであり、外国語は廃止するべきという前掲匿名論文を「時代錯誤」のものと切り捨てているのである。

以上で論争に参加した5人がひととおり出揃ったことになる。次節では、匿名で語学教育廃止論者の烏羽玉生を除く4人の論者(益田苦良、堀越勇次郎、大沢治作、高橋栄穂)の考え方とその背景について検討してみたい。

4.「実用」と「教養」

(1)益田・堀越側の主張の背景

これまでその概要を追ってきた語学教育論争において、益田・堀越側と大沢が最も強く対立していたのは、専門学における実用性のみを重視するか否かという点である。そもそも論争の口火を切った益田の主張の骨子は次のようなことであった。

> 專門學校で語學に多くの時間をかける所以のものは將來小説文學を樂しむ爲めではない(出來れば結構な事である)專門原書或は雜誌を讀んで專門學に關する自己の知識の修養に資する爲めであらう。果して左様であるな

らば、も少し實際的な教授法を採るべきではなからうか。

つまり、従来の教育方法は「原書を讀むたしにならぬなどとは申さぬ。間接になるだけで、それも隨分迂遠なものに過ぎない」と益田は主張し、専門学にすぐに直接役立つ語学の授業を期待しているのである。同様に堀越も益田の主張する適当な読本を編纂するにあたっては「專門學科に關係のある言葉を一字でも多く集めること」を主張し、果物の名前等ではなく「專門に關係のある語を覺える事の方が如何に近道であるかは申すまでもありますまい」と即効性を強調していることに注目したい。

高等工業学校が実業専門学校であるからには、語学に関してもこうした実用性が主張されるのは当然のことではある。事実、先に見たような桐生高工の卒業生達から寄せられた語学に関する意見・要望もまたその実用性に基づくものであったことはいうまでもない。そうであるからこそ、小説の短編を集めた読本を読むような現行の教授法は「不必要」とまで益田によって批判されることになるのである。

ところで、「多くの時間をかける」語学のために「毎夜の大部分の時間は之に取られて了ふ」と益田は桐生高工時代を回想しているが、この点について大沢は、「高等學校では、自分の記憶が誤らなければ、一週九時間位から、十時間の英語を課して居ます」と第一高等学校文科における自身の高校生活を振り返る一方で、「一學年を除いては一週僅かに二三時間しか與へられて居らぬ場合、殆ど何をする事が出來やうかと云ひ度くなります」と桐生高工での英語教師としての立場を説明している。このように相対的に見た場合、実業専門学校での語学の時間は極めて限定されていたのであり、帝国大学の予科の位置づけにある高等学校において授業時間の30～40％を語学が占めていた状況[25]に対して、昭和4年度に桐生高工に開設された機械科では、週39時間の授業時間中英語は1年次に4時間、2年次に3時間、3年次には2時間と授業時間全体に占める割合は7.7％でしかなかった[26]。文科理科を問わず高等学校が将来の大学における専門教育に備えて語学に非常に多くの時間を割いていた一方で、高等学校と同じ3年間で専門科目の学習に多くの時間を充てざるを得ない実業専門学校[27]では、語学に充てる時間が限定されてしまうのはやむを得ないことであった[28]。こうした状況下でこそ高等工業学校の語学の授業についての「必要な事に精力を傾けるはよし。されど不必要な事柄にまでいたづらに精力を費すは惜しむべし。Energy lossは極力避くべきではあるまいか」という益田の主張や、「要は勢力の空費を避けて能率を高めやふと言ふのである」という堀越の考え方が示されることになるのである。

さらに、このように語学に実用性を求める実業専門学校の特性は、当時の極端な不況下にあっての就職難という状況ではより一層強まっていたととらえることも可能であろう。たとえば、昭和2年3月、西田博太郎校長は就職希望者の選抜に関して次のような状況を紹介していた。

> 所謂買手である各實業會社や官廳等も、賣付けの巧妙なるに捲かれて選擇の標準を知るに苦しみ、終に今年の如きは異口同音に、人物よりも、體格よりも、只學業成績の優秀なるものをのみ望み、在學中の學業成績表を添へて候補者を引具し、結局點數の高いものから順に採用すると云ふ傾向になり、或は更に就職希望者を集めて學科試驗を課しその得點によつて取捨すると云ふ遣り口になつた（後略）[29]

就職希望者選抜も学力重視の風潮となったことで、そうした面での語学の効率的習得ということも考慮する必要性が高まったといっていいだろう。

ところで、大学予科という立場で一般教育を行なう高等学校とは異なり、3年間で専門の職業人を養成しなければならない高等工業学校に対して国家が負担する費用は当然高等学校の比

ではなかった。高等学校生徒一人当たり政府支出が年間150円から200円であった昭和３年度当時、桐生高工には723円も支出されていたのである[30]。西田校長が「實業學校の生命は學校の實際化である」[31]ということを強調したのも、こうした状況下の実業専門学校という特性から首肯できることである。さらに、そうした条件のもとで語学教育のあり方を検討するにあたっては、アメリカニズムが世界に広まりつつあるという1920年代[32]の時代状況をも考慮しなければならなかったであろう。

以上のように語学教育論争当時の同校では、西田校長のいう「科學の進歩に伴ひ」という理由に限定されないかたちで、語学教育も実利という点から再検討されざるを得ない状況が従来以上に強まりつつあったといってよいだろう[33]。

（２）大沢・高橋側の主張の背景

ここまでみてきたような状況下、大沢が次のような主張をしていたことには注目しなければならないだろう。

> 何事も功利的にのみ走りたがる現在社會の實状に見て、殊に大學系統の如くかの高等學校のやうなロマンチツクな伸び伸びしてた學生時代を有せざる専門學校に於ては、幾分なりとも文學的方面を加味する事が必要では無いか、學校と云ふものが單に功利實用をのみ目的とせず、圓滿なる人物の修養と云ふやうな理想を有するとせば人世の理想的半面である文學のやうなものも多少なりとも加味しても惡くは無いかも知れぬ。

ここではかなり抑制された表現になっているが、「何事も功利的にのみ走りたがる現在社會の實状」だからこそ、まして上記のように桐生高工での語学教育もそうした状況下で実用性がことさらに強く主張される状況だからこそ、「幾分なりとも文學的方面を加味する事が必要」であると主張されるのである。

こうした教育観は、高橋栄穂の先の論説中の次のような主張にも注目させることになる。

> 外國語の學修は唯に専問學術の研究に必要なばかりでなくより以上吾等の精神的生活を深めるために大いに役立つものである。僕は烏羽玉生なる人が何人であるか知らぬがあまりに不用意な態度ではあるまいか。例へ専門教育をほどこすべき専門學校にもせよ唯機械化された人間を養成するが如き態度は絶對に止めねばならぬと思ふ。人間は精神物理有機體だ。簡單な機械的生活を以つて滿足せらるべきものではないやゝもすれば人間を機械化せんとする様な現代産業組織の中に、人間の人間らしき生活をより熱烈に希望する青年の精神的芽生を折取つてまで、機械的人間に作り上げる必要があるかどうか（後略）

経済不況が続いていた昭和初期において、産業の合理化は国を挙げての課題であり、当時の『時報』上には在校生や卒業生の産業合理化をめぐる論説がしばしば掲載されており、西田校長自身も含めて特にフォードの経営理念などを称揚する状況にあった[34]のであるが、それは高橋がいう「人間を機械化せんとする様な現代産業組織」ととらえられる可能性もあるものであった。つまり、フォードの会社においては社会調査部がアメリカ生まれの中産階級の生活様式を標準として、個々の労働者の日常生活を改善すべく調査、勧告にあたっていたが[35]、そのめざすところは具体的には次のようなことであった。

> ＜社会調査部＞が理想としたのは、中産階級的な理性とセルフ・コントロールとを持し、機械化に対応可能な合理性を有し、産業社会全体への貢献を自己のしめる持ち場において着実に果たしうる労働者という、抽象的で新しい人間のイメージであった。かくして、近代的産業社会における機械と人という２つの基本的要素を、同時に合理化することを追求した点にこそ、フォーディズムの特色

があったといえよう[36].

こうしたフォードの経営理念を称揚する傾向にあった桐生高工にあって、大沢、高橋はそういった点を批判的にとらえていたということであろう。

そのような「人間の機械化」という点に彼らが批判的であったのは、大沢も言及していたように彼らが高等学校の卒業生であったことと無関係ではなかろう。学歴貴族達の特権的モラトリアム空間であった高等学校の文化は実利や名利を軽蔑していた[37]といわれるが、各高等学校では明治40年前後からいわゆる教養主義がその主流文化となっていく。「哲学・文学・歴史などの人文学の習得によって、自我を耕作し、理想的人格を目指す人格主義」[38]という教養主義であるが、竹内は、いずれも第一高等学校から東京帝国大学を卒業した阿部次郎、安倍能成、和辻哲郎、小宮豊隆らを「教養主義の旗手」と位置づけている[39]。多くの高等学校の中でもとりわけ第一高等学校は教養主義の中心的な位置にあったといえるのであるが、大沢治作は明治36年に第一高等学校文科に入学しており、同じ文科には一学年上に安倍能成と小宮豊隆、二学年上には阿部次郎が在籍し、翌年に2年生に留まった安倍能成とは同期の卒業となり[40]、友人関係にあった人物である[41]。その安倍能成はやはり一高に在籍した岩波茂雄の友人である[42]が、岩波茂雄が創業した岩波書店は、教養主義が岩波文庫主義とも呼ばれたことに端的に示されるように、教養主義の文化エージェントの役割を果たした書店である[43]。大沢はこうした人物が在籍した当時の一高文化の中で高校生活を送り、彼の入学の直前から明治40年まで一高と東京帝大で教鞭をとった英語教師夏目金之助（漱石）の指導も受けている[44]。そして、安倍能成、阿部次郎、小宮豊隆の3人とともに「漱石門下四天王」といわれる魚住影雄[45]も大沢とは第一高等学校で同学年であった[46]。漱石＝岩波文化こそが教養主義文化[47]といわれるまさにその文化の中で高等学校生活を送ったという経歴が大沢の語学教育観にも影響を与えたと考えられるのではないだろうか[48]。その大沢と、同じく高等学校生活というものを経験した高橋にとって、産業の合理化が経済界の重要課題となり『時報』上でも論じられるようになっていた状況下でも、「人間の機械化」という考えに与することは容易でなかったことが想定されるのである。

そうした点と関連して考えなくてはならないのが、論争当時の桐生高工の文化的特質である。はじめに述べたように桐生高工では大正15年1月17日に修養団の支部を設置し、積極的に修養主義の活動を展開していた。西田校長は修養団関係者の多くと個人的な関係を持ち、桐生高工の修養団活動には率先垂範というかたちで参加して修養主義教育を展開する人物であった[49]。この修養主義と教養主義の関係については、明治30年代前後に人格の向上をめざす運動として登場した修養主義の学歴エリート版が教養主義であると筒井はとらえている[50]。教養主義は「哲学・文学・歴史などの人文学の習得」による人格の向上を目指していたのであって、つまり、両主義の根は一つであったのである。しかし、ふたたび桐生高工機械科の授業時間を例にあげれば、昭和4年時点で英語以外の文科系の科目は「修身」が各学年で週1時間あるのみであり[51]、「哲学・文学・歴史などの人文学の習得」をするカリキュラムとはほど遠かったといってよい。つまり、同校では教養主義的な文化の前提条件は非常に乏しかったといわざるを得ないのである。

こうした点に加えて、大正15年1月15日に全国の社研学生・生徒が検挙される学連事件が起こったことに見られるように、語学教育論争時にはマルクス主義が各学校で広まっていくことになる。昭和3年4月の入学式において西田は、「各自が故らにこれら所謂社會科學を研究する必要はなし從て此問題の自由研究は學校の與ふる正科（ママ）時間以外でも觸るる事を許しません」と新入生に訓示している[52]が、ここでいう「社會科學」がマルクス主義のものを意味し

ていることは明白であり、同校ではそれが厳しく禁じられたわけである[53]。

昭和初期には一般に教養主義が衰退しマルクス主義が各学校で流行することになるが、マルクス主義は教養主義の上級篇の位置にあったともとらえられている[54]ものである。もともと教養主義的文化の要素が乏しかった桐生高工では、マルクス主義の禁止というかたちで教養主義的文化の基盤がさらに弱められたともいえるのである。

それに加えて同校ではそうした思想問題への対策という意味も含めて大正15年度以降体育の振興に積極的に乗り出し、翌昭和2年度からは放課後必ずスポーツ活動に参加することを校長自ら生徒に強調した。そのために授業終了時間を30分繰り上げる措置もとられ[55]、先に見た時間の逼迫という状況が一層進むことにもなったのである。従来以上に時間のやりくりをして運動部活動が強制される状況下で、生徒たちは専門科目以外の人文学的教養等に触れる機会は極端に少なかったといわなければならない。さらに昭和3年3月の「3・15事件」以降、スポーツによる国民の思想善導政策が展開されることになると、それを先導するかたちで体育振興を図っていた桐生高工では一層スポーツが重視されることになるのである[56]。

かつて明治30年代後半に第一高等学校を始め各高等学校で校内に教養主義的な文化が芽生え始めると、そうした立場の生徒と運動部活動に重点をおく生徒との軋轢が高まりやがて教養主義が主流になっていったという経緯があり、第一高等学校の場合、前述の「漱石門下四天王」の一人魚住影雄が運動部批判の急先鋒であった[57]。語学教育論争における大沢の主張は、桐生高工においてマルクス主義が禁止され運動部活動が活発化するという状況、つまり教養主義的文化の存立のための条件が従来以上に弱まりつつある状況下での教養主義の立場の表明という意味もあったと考えられるのである[58]。

ところで、大沢の論説の背景としてもうひとつ注目したいのは、実用性を主張する堀越の論説の中に次のような表現があったことである。

> 然るに語學者は依然として君（益田君：引用者註）の言はるる通り短篇小説の譯讀をやつて居られるではないか
>
> 勿論語學の先生方にも相當に專門學科に關する智識を持つていただきたいと思ふ

桐生高工の前身の桐生高染を大正8年に卒業した堀越は、大正11年に桐生高工に赴任してきた大沢と師弟関係にはなく、その点大沢と師弟関係にあった益田とは立場が異なっていたとはいえ、『時報』という同窓会機関紙上でのかなり露骨な英語教師批判であるといってよい。

論争当時の桐生高工における専門科目の担当者と一般教育担当者との関係の実態を示唆するひとつの論説がある。同校の体操科の教師松原茂は、自分がかつて勤務していた実業専門学校で、海外留学などを含め専門学科の教員と共通学科の教員との待遇に大きな格差があったことを想起して次のように述べている。

> 專門學校だから專門的の設備を完全にして專門的知識の授與に遺憾なからしむることは素より必要であるが去(ママ)りとて教授の待遇を專門を主とし共通を從とする理法はない況んや人事上のことにまで差別待遇をされてはタマツタ(ママ)ものではない[59]

松原は続けて、桐生高工においてもかつてはそれに類するようなことがあったことをほのめかしつつ、「現校長の時代に至りては著しくかかる傾向を減じた様に私は思ふてゐる」と述べている。専門学科教員と大沢のような共通学科の教員間に何らかの差別待遇があったことを暗に認めている表現だととらえるのが妥当だろう。現に、同種の学校の英語科教員の留学の例は少なく、桐生高工でも専門学科以外の教員で在外研究に出たのは大沢が初めてという状況であったのである[60]。論争における大沢の「専

門の教科書を作ること、之は結構なことであると思ふ。各科で適當な原書や雑誌等から材料を集めて各科の先生方が教授せられたら有益であらうと思ふ」という表現は、先の堀越の露骨な批判の背景にあったと考えられるこうした桐生高工の教員間の関係から出た発言であったとも考えられるのである。

以上のような点も考慮すると、語学教育論争が展開された当時の桐生高工においては、大沢のような教養主義の立場にあったと考えられる教員は少数派であり、表現をかえれば分が悪い立場にあったともいえるだろう。同時に、当時はこれまでみてきたように「実用」を重視する益田・堀越側の立場と、「教養」を重視する大沢・高橋側の立場の対立が最も大きくなる可能性のある状況がもたらされていたととらえることができる。そうした状況下であるからこそ、校内の少数派である大沢・高橋側は自らの考えをあえて表明したのだともいえるのではないだろうか。

5．差異化戦略としての「実用性」
―まとめにかえての仮説の提示―

ところで、5人の論者が各自の主張を展開した語学教育論争は、大沢治作が『時報』編集長からの依頼により執筆した「大問題の英語」[61]（昭和5年2月1日稿）でさらに続くことになる。

大沢は、前掲の高橋栄穂の論説に自分の言いたいことの大部分が述べられていると明言しているが、そのうえで高等教育機関における英語の学習の必要性を5つの点から主張している。一部重複している部分はあるが、その概要は次のようなものである。(1)諸外国との距離が接近しつつある今日、日本国民の価値を高めるためにも専門学校や大学で英語に関する土台を作っておくことが必要である。(2)外国語の学習によって、高等程度の学校卒業者の見識が広くなり人格が高くなることが大切である。(3)現代日本の文化は英語混交の文化であり、英語を相当学ばなくては現代文化を理解することができない。(4)日本民族の世界的発展のためには、学問、外交、軍備、経済の分野で勝利することが必要だが、世界は英語の時代であり今後暫くはアメリカが世界を牛耳る時代が予想されるので、英語の知識は大切である。(5)日本民族が世界の文化に追随し発展していくための前提として外国を理解することが必要で、そのために外国語の知識がなくてはならない。

こうした大沢の論説をうけて、昭和5年9月号の『時報』には論争のきっかけを作った益田苦良が論争の最後となる論説「再び語學教育問題に就て」[62]（8月21日稿）を寄せている。彼は、「私は母校では少くとも二種類のテキストを編纂して貰ひたいと前に書いたが今となつては、之だけで語學教授の能率が發揮されるものの如く考へてゐたのは自分としても少し速斷の嫌ひが無いではなかつた。否！近頃の自分としては専門のテクニカル、ターム（ママ）づくめの教科書や參考書ばかりの語學勉強ではどうにも我慢がならぬ様な心的傾向を發見していささか妙な心地さへしてゐる處である」と述懐している。大沢の論説について何らか考えるところがあったことが示されているととらえてよいだろう。ただし、益田は、かつて自身が主張したタイプのテキストが実際に出版されたのを機に読んでみた感想として、「我等の語學力に或る力を與へる點に於て專門學に從事する程の者には矢張り必要で、一度は通過せねばならぬ關門ではないかとの感を深うした」と述べ、自分のかつての主張を改めて強調してもいるのである。

以上のようなかたちで桐生高工の語学教育論争は終結した。ここでは、この論争で示された益田・堀越側と大沢・高橋側の考え方の違いという点を手がかりに、当時の桐生高工の学校文化と同校卒業生の特質を検討してみたい。

ところで、高等工業学校の学校文化を考えるにあたって、神戸工業専門学校（神戸高等工業学校の後身）から京都帝国大学へ進学するというコースをたどった河合隼雄（臨床心理学者）の次のようなコメントに注目したい。

あのころは高等学校というのは人生の教養を身につけるところだったのです。みんな哲学書を読んだりするでしょう。だけど、工業専門学校いうたらいわゆる即戦力だから、電気の技術を確実に身につける。……

……いわゆる教養として高等学校で習うことをぼくは全部習ってないんですよ。大学に入学したものの無教養であるという劣等感はずっと付きまとったんです[63]。

高等工業学校（工業専門学校）から大学へというルートをとったという点では益田と河合は同じ経験をしたということであり、こうした河合の意識と共通するものを益田、堀越も持っていたのではないだろうか。

益田は、弟と二人母親の手で育てられ、のちに叔父の家に引き取られたという苦しい少年期を経て苦学した人物であり、大正14年の桐生高工卒業後に一旦旭川師範学校での教員生活を経験してから昭和３年に大学に進学している[64]し、堀越は桐生高染の受験に際しては陸軍士官学校を第一志望として出願していたと回想している[65]。こうした２人の経歴を、一高―東京帝大のルートをとり学生時代には東京の本郷でも上の部の高等下宿で生活していた[66]という大沢と対比させてみると、高工進学者と高校進学者の社会階層の違いが端的に表れているといってよいだろう。

高工生が河合のような劣等感を高校生に対して持っていたとすると、「実利」を軽蔑するというかたちで高工生に対する差異化戦略をとっていた高校生に対する逆向きの差異化戦略として、彼らは自らの「実務能力」や「実用性」を強調するということにならないだろうか。

益田は大学卒業に際して、「思ひ起す事共」という文章を『時報』に連載しており[67]、その中で大学での同級生とのいさかいについても語っているが、その人物を「高等學校出の」というかたちで紹介している[68]。そもそも益田は論争時点でも最初の論説で「高等學校出の人まで」という表現を使用していたのであり、こうした点は彼が高校出身者に対して何らかの意識を持っていたことを示唆しているといえるだろう。益田が高校出身者とともに学び、堀越が高校―大学出身者とともに働く立場にあったことが、彼等の語学教育観も「実用性」をとりわけ重視するものにしたのではないだろうか。前述のように、論争当時は桐生高工の学校文化が高等学校の教養主義的な文化と従来以上に異質なものになりつつあったのであり、そのことが彼らの上述のような意識をより高めて、先に紹介したかたちで語学教育論争が展開されることになったと考えることができるのではないだろうか。一つの仮説として提示しておきたい[69]。

〔註〕

（１）修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史 概史』(財)修養団 昭和60年 37頁。

（２）拙稿「桐生高等工業学校における修養主義教育と体育振興－戦間期の社会状況の中で－」『仙台大学紀要』第35巻第２号 2004年。

（３）語学教育に関して実用を重視するのか形式陶冶の面を重視するのかといった問題については従来から議論が繰り返されてきている。この桐生高工での論争もそうした点が重要な対立点となっているが，本論文はその問題を直接扱うものではなく，そうした各論者の主張の対立という点から当時の同校の学校文化ならびに卒業生の特質について検討するものである。なお，同校は大正５年に色染，紡織の２科からなる桐生高等染織学校として授業を開始したが，応用化学科の新設により大正９年に桐生高等工業学校と改称している。

（４）『桐生高工時報』第18号（昭和２年５月10日）３頁。

（５）『桐生高工時報』第20号（昭和２年７月10日）９頁。東京帝国大学で応用化学を専攻した工学博士である西田は，「尋常科を卒へたる自分は特に英語に興味を持ち」，「中學に入いれた自分は（中略）英語と化學には趣味を深ふした」と述懐している（『桐生高工時報』第14号 昭和２年１月10日 ２頁）が，大学卒業後にはイギリス，ドイツ，ロシアでの留学生活の経験を有し，語学には非常に堪能な人物であった。群馬大学

工業会西田先生伝記編集委員会編『独澄庵西田博太郎先生伝』群馬大学工業会 昭和59年 599～600頁，603頁ならびに『桐生高工時報』第52号（昭和５年２月10日）11頁ほか。なお，専門学校生は本来は「生徒」と呼ぶべきであるが，桐生高工では附属商工専修学校生の呼称として「生徒」を用い，桐生高工生を「学生」と呼んで区別していた。桐生高等工業學校編『桐生高等工業學校二十五年史』桐生高等工業學校 昭和17年 635～636頁。後出の卒業生益田苦良は正しく「生徒」を使用しているが，本論文も「生徒」で統一する。

（６）『桐生高工時報』第24号（昭和２年11月10日）２頁。

（７）『桐生高工時報』第17号（昭和２年４月10日）６頁。

（８）国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第一巻 教育政策１』（財）教育研究振興会 1974年 295～296頁。

（９）『桐生高工時報』第27号（昭和３年２月10日）１頁。

(10)『桐生高工時報』第31号（昭和３年６月10日）12頁。なお，卒業生の卒業年や勤務先等に関する情報は，『桐生高工時報』各号ならびに各年度の『桐生高等工業學校一覧』による。

(11)『桐生高工時報』第34号（昭和３年９月10日）９頁。

(12)『桐生高工時報』第33号（昭和３年８月10日）６頁。

(13)『桐生高工時報』第34号（昭和３年９月10日）10頁。

(14)『桐生高工時報』第32号（昭和３年７月10日）７頁。

(15) 同上 ８頁。

(16)『桐生高工時報』第30号（昭和３年５月10日）４頁。

(17)『桐生高工時報』第39号（昭和４年２月10日）１頁。なお，この論争の各論者の論説については，初出の際に出典ならびに該当ページを紹介し，以後は註記を省略する。

(18) 昭和３年度当時の桐生高工は，色染科，紡織科，応用化学科の３科構成であり，機械科が昭和４年４月に開設される予定となっていた。

(19)『桐生高工時報』第41号（昭和４年４月10日）１頁。

(20)『桐生高工時報』第43号（昭和４年６月10日）１～２頁，第44号（昭和４年７月10日）１～３頁。

(21)『桐生高工時報』第48号（昭和４年11月10日）６～７頁。

(22) 烏羽玉生は，日本語の漢字制限，かな文字・ローマ字表記などに関する議論が盛んな状況を紹介しながら，そうした日本語問題を抱えている状況下であることもその主張の背景として強調している。

(23) 高橋栄穂は当時，嘱託として桐生高工で数学を担当していた。『桐生高工時報』第41号（昭和４年４月10日）１頁。

(24)『桐生高工時報』第50号（昭和４年12月10日）７頁。

(25) 竹内洋『＜日本の近代12＞学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社 1999年 251，253頁。

(26) 群馬大学工学部75年史編纂委員会編『群馬大学工学部75年史』群馬大学工学部 平成２年 39～40頁。ただし，同科では課外にドイツ語を各学年週３時間割り当てている。なお，昭和初期の東京高等工業学校応用化学科の外国語（英語）の授業時間の割合は9.4％である。竹内同上書252頁。

(27) 桐生高工では，中等学校で履修された科目のやり直しのような科目の必要性から，専門科目の学習に充てる時間の捻出にも苦慮していた。『桐生高工時報』第６号（大正15年５月７日）２頁。

(28) ただし，同じ実業専門学校でも学校種別により当然事情は異なり，昭和６年の長崎高等商業学校は英語の時間が27.5％，選択外国語の時間が6.9％の計34.4％である。竹内前掲書252頁。

(29)『桐生高工時報』第17号（昭和２年４月10日）６頁。

(30)『桐生高工時報』第66号（昭和６年４月10日）６頁。

(31)『桐生高工時報』第59号（昭和５年９月10日）９頁。

(32) 姜尚中・吉見俊哉『グローバル化の遠近法－新しい公共空間を求めて』岩波書店 2001年 1～15頁。

(33) 益田は大学で化学を学ぶ学生であり，堀越も英国の大学で一学生の立場に戻り専門の教育を受けている状態で，元来語学の苦手な堀越（『桐

生高工時報』第48号 昭和4年11月10日 12頁）が試験の答案作成に大いに苦労していた（『桐生高工時報』第43号 昭和4年6月10日 7頁）という個人的な状況もあり，両人がそれぞれに実用的語学の重要性を痛感する立場にあったということが彼らの主張の直接的背景になったと考えられる。なお，大正15年の応用化学科卒業生で東北帝国大学の聴講生になっていた麦島与が「獨逸語でいぢめられるのには閉口してゐます」と述べている点にも注目しておきたい。『桐生高工時報』第34号（昭和3年9月10日）9頁。

(34)『桐生高工時報』第29号（昭和3年4月10日）2頁ほか。

(35) 古矢旬「アメリカニズム：その歴史的起源と展開」東京大学社会科学研究所編『20世紀システム1 構想と形成』東京大学出版会 1998年 91頁。

(36) 古矢同上論文 93頁。

(37) 竹内前掲書 259頁。

(38) 同上書 237頁。

(39) 同上書 279頁。

(40)『第一高等學校一覧 自明治三十六年 至明治三十七年』第一高等學校 明治36年 110～123頁，『第一高等學校一覧 自明治三十七年 至明治三十八年』第一高等學校 明治38年 118～119頁，『第一高等學校一覧 自昭和十一年 至昭和十二年附録卒業生氏名』第一高等學校 昭和11年 103～116頁。

(41) のちに大沢が出版した著書（大沢治作『ノミと校長と教授たち』桐生工業会内本書出版後援会 昭和40年）の扉には当時学習院大学学長となっていた安倍能成が題字を揮毫している。

(42) 安倍能成は昭和32年に岩波書店から出版された『岩波茂雄傳』の著者でもある。

(43) 竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社 2003年 第4章。

(44) 大沢前掲書 著者紹介欄。

(45) 竹内前掲書（1999）196頁。

(46) 註（40）に同じ。

(47) 竹内前掲書（2003）150頁。

(48) 大沢は埼玉県境に近い群馬県の農村部で育っている（大沢前掲書）が，教養主義の殿堂といってよい東京帝国大学文科大学さらには後の文学部には農村出身者が多かった（竹内同上書 109～111頁）ということに注目しておきたい。

(49) 西田の修養主義教育については前掲拙稿の他，以下の拙稿で扱っている。「1920年代の実業教育と地域社会－群馬県桐生地方の修養主義に関する一考察－」『仙台大学紀要』第30巻第2号 1999年，「昭和初期の桐生高工における就職問題について－修養主義およびフォーディズムとの関連で－」『仙台大学紀要』第36巻第2号 2005年，「昭和初期における実業専門学校長の欧米認識－修養主義および産業合理化論との関連で－」『仙台大学紀要』第37巻第2号 2006年，「昭和初期の就職難問題と修養主義 －「学校出」の価値をめぐって－」『仙台大学紀要』第39巻第1号 2007年。

(50) 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店 1995年 第1章。

(51) 前掲『群馬大学工学部75年史』39～40頁。

(52)『桐生高工時報』第30号（昭和3年5月10日）2頁。

(53) マルクスの『資本論』が岩波文庫の2冊目として出版されるのは同文庫創刊と同じ昭和2年であった。竹内前掲書（2003）156～157頁。

(54) 竹内同上書 50頁。

(55)『桐生高工時報』第19号（昭和2年6月10日）7頁。

(56)『桐生高工時報』第31号（昭和3年6月10日）6頁ほか。

(57) 竹内前掲書（1999）第4章。

(58) なお，西田校長は明治28年から3年間の自身の山口高等中学校生徒時代を回想して，「高等學校の三年間自分は徹頭徹尾運動家として通過した」と語っているが，具体的には，「運動家としての自分はベースボールの選手であり，キヤプテンでありフート（ママ）ボールの選手であり部長であり，ランニングの級選手であり，撃劍をやり柔道をやり，機械（ママ）體操をやり」という生活であった。『桐生高工時報』第16号（昭和2年3月10日）2頁。高等学校の文化が教養主義的なものになる前の時代の典型的な運動部型生徒ととらえてよいだろう。

(59)『桐生高工時報』第29号（昭和3年4月10日）11頁。

(60)『桐生高工時報』第27号（昭和3年2月10日）12頁。

(61)『桐生高工時報』第53号（昭和5年3月10日）8～9頁，第54号（昭和5年4月10日）8～9

頁，第55号（昭和５年５月10日）６頁。

(62)『桐生高工時報』第59号（昭和５年９月10日）７頁。

(63) 竹内前掲書（1999）259頁。

(64)『桐生高工時報』第64号（昭和６年２月10日）４頁，第65号（昭和６年３月10日）３頁，第66号（昭和６年４月10日）３頁。

(65) 前掲『群馬大学工学部75年史』725頁。竹内は，「第一次世界大戦以後（中略）相対的に貧困層が軍学校を選び，高等学校や帝国大学は相対的に豊かな層の学校という傾向が顕著になったといえる」と述べている。竹内前掲書（1999）182頁。

(66)『桐生高工時報』第65号（昭和６年３月10日）４頁。

(67) 註（64）に同じ。

(68)『桐生高工時報』第65号（昭和６年３月10日）３頁。

(69) さらに，高工生という存在が一般にそうした意識を持っていたとすると，高工卒業生が高校－大学卒業生に伍して働く状況下で，彼らは自らの「実務能力」と社会における「実用性」を自負するということにもなるのではないだろうか。そうした彼らの高校出身者に対する逆向きの差異化戦略こそが，彼らがその実務能力によってわが国の工業界を中堅の位置で支えるという機能を効率的に果たすことを可能にしたのではないかという，もう一つの仮説も併せて提示しておきたい。